

■リーダーズ・ナウ [在学生・卒業生インタビュー]

学生自らの手で、独自の演劇世界を展開!

身体とことばを駆使して、表現の可能性を広げていきたい

●演劇サークル「万絵巻」代表・総合情報学部 3年次生 岡崎 正典 さん

高槻キャンパスを本拠地に展開する演劇サークル「万絵巻(よろづ系まき)」は、総勢43名。京阪神で活動している学生演劇サークルの中では比較的規模の大きい団体だ。彼らは年に5、6回の公演を、脚本・演出から大道具・小道具、音響、メイク、広報まで、外部からの招へいなしに全て学生たちだけでこなす。「万絵巻」のパワフルな活動ぶり自身の学生演劇への思いを、代表の岡崎正典さんに語ってもらった。



岡崎 正典—おかざき まさふみ
■1987(昭和62)年、神奈川県生まれ。桐蔭学園高等学校卒業。総合情報学部3年次生、演劇サークル「万絵巻」代表。

「万絵巻」の特徴は何かと聞くと、「自由と若さ」という答が返ってきた。

なにしろ、千里キャンパスにある演劇サークルに比べると歴史が浅い。高槻キャンパスは1994年生まれ。「万絵巻」もその創生期から活動が続け、中にはプロの俳優になった卒業生もいる。「創生期から、特定の個人や組織の真似はしないと決めて活動してきたと聞いています」手探りの中から少しずつ方法を作り上げ、独自の創作方法が築きあげられていった。今の「万絵巻」があるのは、そうした先輩たちのおかげだ。

自由とは、役者たちがジャンルに縛られず、何でも演じられるということ。また同時に、誰が台本を書いてもいい、という自由もある。既存のシナリオは使わない。最近は脚本を書きたいという人が増えてきた。自分の思いが形をなし、舞台の上で演じられる喜びが感じられるからだろう。

岡崎さん自身が、何をきっかけとして芝居に目覚めたのかを聞いてみた。はじまりは何と3歳の時。幼児教室の学芸会で舞台上がり、楽しさを知った。中学校3年の時には、文化祭の芝居が取りやめになったのが寂しく、演じるのが好きだと改めて気づいたという。地元神奈川県の高校時代には、脚本にも挑戦した。

「万絵巻」では演出・脚本・役者と3つの仕事をこなす岡崎さんだが、それぞれに喜びや苦労がある。「どの脚本、役者を使



劇団万絵巻公演「六畳一間のワンダーランド」

い、どんな照明・音楽で芝居を作り上げるか、全てを決めるのが演出家。イメージ通りの芝居を作る喜びを経験できます」演出によって、同じ芝居でも全く雰囲気が違うものになるのが面白いという。反面、部員の気持ちを一つにまとめ上げる苦労があり、煩瑣なスケジュール管理もついて回る。

一方、役者の喜びと苦しみは、表現することそのものにあるという。「自分に“こう演技したい”というものがあって、それができなかった時は、本当に苦しい。どうしたらいいのだろうと悩み、自分の演技をビデオで見るのですが、自分自身と対峙させられる恥ずかしさ、苦しさ。それがつらいですね」納得できる演技のためには、自分と向き合わねばならない。しかし、自分の演技に納得できた時、あるいはそこまでいなくても解決の糸口が見つかった時は、本当に喜びを感じる。その達成感、自分ひとりでも、仲間と共に表現していても同じという。

「脚本の苦労は？」と聞くと、「締め切りが一番早いこと。台本がないと芝居ができませんから」と笑った。脚本の質を高めるためにプロの作品も勉強し、ノウハウを盗む。自作品のレベルアップを感じる瞬間は、素直に嬉しい。

現代は、バーチャル体験全盛の時代だといわれる。映画、インターネットなど様々なメディアがある中で、芝居のどこに惹かれるのか? 「身体とことばだけで、何でもできるのが演劇。表現の可能性を体感できます」この夏、他大学の演劇サークルのメンバーと、1週間でゼロから芝居を作り上げる企画を立てているのだという。何が飛び出してくるのか全く予想もできないところが楽しみだ。

現在3年次生。そろそろ将来の進路を決め、後輩に「万絵巻」をバトンタッチする時期がやってくる。伝えたいことは山ほどあるが、まず自分で行動することの大切さを実感してほしいと思う。ただ待っていても、誰も教えてくれない。岡崎さんも、多くの先輩たちからそのことを学んだ。後輩たちに伝えたいことは、結局、「自分がやらなければ、何も始まらないよ」というひと言だけだ。

全身全霊をかけ発掘と研究に邁進する

「考古学は蓄積の学問であり、勉強こそ総て」
榎原考古学研究所、第5代目所長に就任

●榎原考古学研究所所長 菅谷 文則 さん 一大学院文学研究科 1967年修了—

「飛鳥美人」で有名な高松塚古墳(奈良県明日香村)の壁画や、藤ノ木古墳(斑鳩町)の金銅製馬具発見など、歴史を塗り替える数々の発掘調査に携わってきた榎原考古学研究所(以下、榎考研)。今年4月1日、その第5代目所長に菅谷文則さんが就任した。その菅谷さんの人生に大きく影響を与えたのが、榎考研の初代所長であり、関西大学文学部の教授だった末永雅雄先生。恩師の教えは今も菅谷さんの中に脈々と受け継がれている。



中国での発掘風景(1998年6月)

菅谷さんが通った畷傍高校には考古室があった。展示されている遺物を面白そうだなと思ったのが、考古学への意識が芽生えた瞬間だ。高校1年生から榎考研で勉強をはじめ、2年生のとき、初めて発掘調査に参加した。「当時は高校生も発掘調査に使って貰えました。卒業する頃には今の大学生の総経験よりも多くの経験をしていたのでは」そしてこの榎考研で、菅谷さんの生涯の恩師となる初代所長・末永雅雄先生に出会った。

大学受験をした菅谷さんは国立二期校に行くつもりだった。「当時、関西大学の教壇に立たれていた末永先生が、ある人を通じて『菅谷君は合格しているのに手続きしていないじゃないか』と言われたのです。家は豊かでなかったのに、家族会議を開き、兄に費用を出してもらい関西大学に行きました。末永先生のお声掛けがなかったら行ってなかったのではないかと思います」

末永先生にはよく怒られた。「ゼミの発表中、私は「え〜、あの〜」と言ったり、頭を掻いたりしていました。先生はノートに正の字を書いてその回数を記録し、一切止めると厳命されました。先生は怒り出すと2時間くらい平気で怒る。それは怖かったですよ。立ち居振る舞いに厳しい先生で、お辞儀の仕方も注



菅谷 文則—すがや ふみのり

■1942(昭和17)年、奈良県生まれ。関西大学大学院修了。1968年奈良県教委文化財保存課技師に採用され、1974年奈良県立榎原考古学研究所研究職技師に。飛鳥浄御原宮跡や法隆寺、唐招提寺など多くの発掘調査に携わる。1995年滋賀県立大学教授に就任。2008年春に退職し、同大学名誉教授に。日本学術会議連携会員。日本考古学協会理事。

意されました。私たちは人間教育をしていただいたのです」

真面目な学生で、片道2時間半かけて通学し、朝早くから研究室に行き、夜遅くまで本を読み勉強した。そして、和歌山にある岩橋古墳の発掘調査に没頭した。「4年間のうち600日は和歌山にいました。今でも和歌山の方言をしゃべれるくらいです」

榎考研に勤めてからは、飛鳥の宮殿、法隆寺、唐招提寺などの発掘に携わった。印象深い調査のひとつである法隆寺には、聖徳太子が建立したという説と焼失し再建されたという説があり、約100年前から物議を醸していた。発掘範囲が狭く何があるのか予想のつく古墳に比べ、寺の跡はどこに何があるのかわからず、小さな手がかりを元に発掘を進める。「ある日閃いたのです。4本の柱穴と3本の柱穴は連結するのは、と」古代の寺や宮殿は必ず四方が直角で、周囲には区画壁となる柱が数百本並んでいる。調査員3人で図面整理をし、2カ所の柱穴列に三角定規を当てると直角に交わった。現在の輪郭とは異なる法隆寺跡が現れ、寺は一旦潰れたという証明になった。「考古学は演繹10%に帰納90%。直角になると思っただけでは、図面上で証明しなければ。このときばかりは心の中で喝采しました」

榎考研の新所長として、調査にも強く研究を反映し、小さな遺跡の発掘も研究であることを忘れず行う。着任の際、職員にはまず礼儀作法を訓示した。今の学生に対しては、「アルバイトはするな。社会勉強は会社に2週間も勤めれば十分です。死ぬほど勉強してください」これも末永先生から受け継ぐ教えのひとつだ。考古学は蓄積の学問であり、勉強こそが総てだ。と。「あと30年楽しい人生が送れるのなら、学生時代の4年間を一生懸命勉強した方が得に決まっている。これは私の人生観です」